

## 「日本」のコンラッド — 戦前日本のコンラッド受容について —

脇 田 裕 正

**Abstract** The aim of this essay is to discuss the reception of Joseph Conrad in Japan. In particular, the focus will be on the relation between Conrad's works and the teaching of English in the Imperial Naval Academy and at the High Normal School in Hiroshima from the 1920s to the 1940s. The overview will reveal that there were certain characteristics in the reception of Conrad throughout modern Japan: there were many people who read Conrad's works as English language texts in high schools and universities, at the same time there were a few people who considered seriously the importance of Conrad's works to criticize western imperialism and colonialism in the early 1940s. Maruyama Manabu, for instance, an English teacher in the High Normal School, pointed out the importance of Conrad's works in a book in 1944. This case indicates a unique reception of Conrad in modern Japan. So I will survey Maruyama's career from the 1920s to the 1940s. Finally, I will demonstrate the limitations of the reception in Japan as shown in Japanese Conradians' attitudes toward the author.

### 1) コンラッドの死と日本

1924年8月3日コンラッド死去の報は、2日後の8月5日の朝日新聞でも取り上げられており、日本にも即座に伝えられた様子が分かる。この後、『英語青年』や『新文藝』といった文芸誌でコンラッドの特集が組まれることになる。文芸誌以外でも、たえばコンラッドの死去から2ヶ月後、『燈光』の10月号に「Conradに就いて」という一文がある。関谷生と署名されたこの記事では、朝日新聞の死去の記事を中心に、欧米の新聞も参照しながらコンラッドの作品を紹介している。

『燈光』は1915年に燈光会によって創刊され、現在も刊行されている息

の長い雑誌であるが、そもそも燈光会は津々浦々に散らばる灯台守たちの援護組織として設立され、「燈光」はその機関誌として刊行された。つまり『燈光』は帝国日本の広範囲な「辺境」に送り届けられた雑誌だった。

『燈光』創刊号には次のような記事がある。「機関誌の本領として、標識事業に対する学者名士の所論も多かるべけんが、執筆者は難解の文章や外国文学は、出来得る限り平易に且つ日本語に遣って欲ひのである（ママ）」

（岩田 10）。たしかに『燈光』では、灯台の維持管理、海洋権益、船舶の技術的な問題だけではなく、「外国文学」の翻訳や紹介なども度々掲載されている。前述した閔谷は『燈光』でコンラッド以外にもスティーブンソンなどの紹介も試みている。いわば『燈光』には、1920 年代の日本の英文学受容が、文芸誌や専門的な外国文学の研究誌に限定されず、幅広い分野で受け入れられていた可能性の一端を示しているのである。

戦前の日本のコンラッド作品受容を見た時、文芸誌や英文学研究といった分野とは性質が異なる『燈光』のような媒体でもコンラッドの作品は度々翻訳されている事が判明する。たとえば海軍の機関誌である『水交社記事』や海軍協会の『海之日本』といった海軍系の雑誌でコンラッドの生涯とその作品は紹介されている。つまり日本におけるコンラッド受容を検証すると、そこには英文学者などの文学者のみならず、灯台守から軍人にまで至る、多種多様な人々とコンラッド作品との出会いを浮き上がらせることになる。

たとえば、前述した『燈光』誌上で閔谷は、コンラッド作品について次のように述べている。「彼の作品はいずれもフレッシュな叙景とそのバツクをなす神秘的な力強い何か宿命的なアトモスフィアーがある。これ彼の荒寥たる海洋生活の実感である。何人も彼程生き生きした人間味と自然の理解をもつた人はいない」（閔谷 35）。コンラッド作品の自然描写を賞賛し、かつその自然描写が、ある種の哲学的な問題を示唆するものであるという指摘。これは、実は夏目漱石のコンラッド論から続く、日本におけるコンラッド受容の一つの典型と言える。

雄大なる海洋、勇気ある船乗りたち。このような題材は、恋愛小説や政治小説とは異なり、安心して中等教育の英語の教科書として取り上げることができるだろう。実際、「Youth」を中心にコンラッドの作品は、1920 年

代から 40 年代にかけて、たびたび中等教育の英語の教科書として採用された。

一方で、作品論を含めたコンラッド作品に関する独自の研究や批評は驚くほど少ない。このような受容形態のアンバランスこそ、近代日本のコンラッド受容の特色である。ドストエフスキーやジイドといった欧米の著名作家のように、戦前からコンラッドの名は知られていたにもかかわらず、終戦まで、ついにまとまった量のコンラッド論や、ユニークなコンラッド論といったものが日本で書かれるることはなかったのである。日本の文学者は、ジョイスや D.H. ロレンスに惹かれるようにはコンラッドには惹かれずその重要性を認識することはなかった。あくまでも青年たちの英語教科書として、コンラッドの作品は受け入れられてきたと言っても過言ではない。これを、戦前の日本の文学者たちの欧米文学・文化を理解することの限界点、もしくはある種の特徴と指摘できるのかもしれない。

だとしても、近代日本でコンラッドの作品は具体的にどのように読まれてきたのか。実はコンラッド作品が日本で紹介されるようになって 100 年以上が過ぎたにも関わらず、日本のコンラッド受容史の具体的な検証は、まだほとんどなされていないのが現状である。

本論では、近代日本におけるコンラッド受容について考えるための第一歩として、「軍都」広島におけるコンラッド受容を中心に検証していきたい。広島こそ、帝国日本におけるコンラッド受容の中心地だったからだ。

## 2) 海軍・英文学・コンラッド

1939 年、旧制一高と三高を除き旧制高等学校でのフランス語教育の廃止が決定した。それに対して辰野隆は次のように批判している。「海軍が益々つのる英語の必要に鑑みて絶えず英語教員を採用しつつある実情はそもそも何を語るのであろうか」。辰野が指摘しているように、第二次大戦下においても海軍は海軍兵学校を中心にして英語教員の採用を継続し、実は終戦直前まで英語教育を存続させた。

海軍でも太平洋戦争開始直後、兵学校の生徒採用試験科目から英語を除外しようとしたことがある。しかしこの時、海軍兵学校校長だった井上成美が英語試験の存続を強く主張した。「一体何処の国の海軍に、自國語一つ

しか話せないような兵科将校があるか。(中略) 私が校長の職に在る限り、英語の廃止というようなことは絶対許可しない方針である」(阿川 257)といふ言葉は、海軍の英語教育重視の表れとしてよく知られている。

日本海軍はその創設からイギリス海軍の影響を強く受けていた。江利川春雄が「世界の2大海軍国は英米であり、技術面、作戦で英語は海軍士官の必須能力であった」(江利川 294)と指摘しているように、日本の海軍士官にとって英語は重要なツールだった。そしてその重要性は、太平洋戦争の勃発によって一層増し、海軍兵学校では「帝国大学および文理科大学の出身者が文官教授として赴任したほか、戦時下での生徒の急増に対応するために、兵科士官や大学・高専卒の海軍予備仕官が動員された」(江利川 298)。太平洋戦争期、日本各地での英文学研究が困難になっていくなか、海軍兵学校では英語教師を必要としたのである。その結果、大橋健三郎を初め、後に著名な英文学者たちが兵学校に赴任した。

興味深いのは、英語教育と同時に、海軍兵学校では戦時下においても英文学研究も行われていたことだ。たとえば英語教官を中心とした「北斗会」と名付けられた研究会が1941年に発足した。毎月7日、海軍兵学校将校集会所で北斗会は開催されており、松村幹男によれば「昭和16年9月から昭和20年2月まで三年半にわたり通算回数は実に36回に達している」(松村5)。松村は「敵国の言語文学について研究発表や討議が出来たのは何故か、どうしてそれが可能であったのか、学校内での批判や非難は皆無であったのか」などについてはっきりしたことはわからないと述べつつ、「北斗会活動には山本忠雄・東田千秋、広島文理大学・兵学校との関係、緊張・刺激作用があったのではないかと推測」(松村9)している。ここで松村が言う東田千秋とは海軍兵学校教授であり、東田は「コンラッドについて」という発表を北斗会で行っている。戦時下の海軍兵学校で、コンラッドに関する研究が行われていたのである。

東田千秋は、日本海軍のコンラッド受容について考える時、最も重要な人物の一人である。1910年兵庫県生まれ、1927年に大阪高等学校入学、1930年東京帝国大学に入学、1933年に文学部英吉利文学科卒業の後、1937年から海軍兵学校教授となっている。いわば英文学界のエリートコースを歩んだわけだが、戦時中の環境について次のように回顧している。

すでに日支事変の始まっていた不安な世の中で英文学を話題にすることには何か特別な興奮があったように思う。やがて戦争は拡大し、洋書の輸入は途絶え、外国文学研究のいわば空白時代が終戦まで続くのであり、その後遺症は今日もなお消えていないようである。幸い兵学校は終戦の日まで英語教育には力を注いでいたので、英語を教えることで肩身の狭い思いをしたことがなかった。（下線筆者）（東田 c35）

残念なことに、海軍兵学校時代の東田の研究と教育活動については分からぬことが多いが、戦後になって出版された還暦記念論文集の著述一覧を参照にすると、東田は戦中・戦後を通してロレンスやコンラッドに関する論文を発表していることが分かる。<sup>1</sup> たとえばある論文で東田は、*Nostromo* の文章について次のように述べている。

形容詞と抽象名詞であって、これらの品詞自体が意味の限定性に乏しく、多少共多義的であることに注意しなければならぬ。初期の作品と比較するならば、*Nostromo* は形容詞よりも（抽象）名詞を愛用する傾向が見えている。この（抽象）名詞によって印象的な表現価値が生まれている。（東田 a41）

東田は自身の研究を文体論と呼んでいるが、その研究は文学作品の語彙や文法の特徴に焦点を当てたもので、それは英文学研究というよりも、英語学や言語学といった分野に近い。つまり東田の関心は、コンラッドやロレンスの思想やその作品の芸術性ではなく、英語そのものにあった。

実は海軍兵学校時代の東田の研究に関しては、彼の還暦記念論文集の業績欄に掲載されていないものが少なくとも二つある。一つは、1941 年の 9 月から海軍の機関誌である『水交社記事』に 4 回に分けて掲載されたコンラッドの ‘To-morrow’ の翻訳。二つ目もコンラッドに関係したもので、1941 年から使用された海軍兵学校の英語教科書の編纂である。この教科書は *Lord Jim* の前半部分を採用し、東田によるコンラッドの略歴と訳註が付いている。教科書として *Lord Jim* を編集した東田の意図から伺えるのは、兵学校の生徒の英語の習得とは、あくまでも海洋に関する英語の知識の習得であり、苦惱するジムの内面を読み解くことではなかった。コンラッドの

テキストは、あくまでも実利的なものとして使用されていたのである。

戦後、東田は海軍兵学校時代の詳細について語っておらず、残念ながら兵学校時代の翻訳や教科書採用に当たっての経緯は不明である。そしてコンラッドの「英語」に関心を寄せる東田の論文からは、彼独自のコンラッド観を見出すことができない。しかし東田によって、日本海軍には40年代に入つてもコンラッド作品が取り入れられており、少なからぬ若き読者が存在していたのである。<sup>2</sup> コンラッドの作品は、英文学に逆風が吹き荒れた1940年代の日本でも意外な場所で受容されていたと言えよう。

### 3) 廣島高等師範学校と丸山学

東田が海軍兵学校に赴任する1年前の昭和10年(1935)、海軍兵学校と交流があった廣島高等師範学校の生徒たちによって1冊の論集が出版されている。『Conrad研究』と銘打たれた、今ならさしづめ同人誌とでも呼ぶことが出来る体裁のものだが、これは当時の高等師範学校の生徒たちのコンラッド作品に対する高い関心を知ることができる興味深い資料である。

『Conrad研究』を出版するきっかけは、当時英語科の教官であった丸山学の影響によるところが大きいようだ。丸山学は、廣島高等師範学校から第一期生として廣島文理科大学に入学・卒業した英文学者だが、1935年当時は母校の助教授だった。生徒たちは丸山が授業で使用した『ナーシサス号の黒人』の読解を通してコンラッド作品に興味を覚え、各自がコンラッドの生涯や個々の作品について調べ始めるようになり、それら各自の研究をまとめたものを『Conrad共同研究』として刊行することになった。

『Conrad研究』には、戦前の日本ではあまり注目されることがなかった『密偵』や『西洋人の眼の下に』といった作品の粗筋も紹介されており、生徒達のコンラッドに対する関心の高さを示している。戦前、一般的に海洋文学の作家のイメージが色濃いコンラッドの多様な諸作品を紹介していることは興味深い。

しかし『Conrad研究』に所収された論文に共通しているのは、作品に対して踏み込んだ解釈を避けていることだ。あるエッセイでは「コンラッドの作品に関する感想は言わない」(増山28)とさえ述べているが、作品内容ではなく、文体や語彙に焦点を当てた論文の多さが『Conrad研究』の特

色である。「コンラッドの文章は長い傾向がある」「Nigger of the Narcissus の文章には名詞が 126、形容詞が 156、動詞が 66 個使われている」(巻 24)。

このようなある種の英語学的なテーマは、昭和初期日本の英文学会の主流な翻訳観であった原文への忠実で正確な翻訳規範と響き合うと言えるのかもしれない。つまり文学作品の芸術性や精神性に注目するのではなく、なによりもまず英語の正確な理解を目的とするというような考え方重なり合うと言えるだろう。そしてこのような研究スタイルは、『Conrad 研究』の刊行に当たって生徒たちに強い影響力を与えた、丸山学の研究についても当てはめることができるだろう。

たとえば、戦前に書かれた唯一の丸山のコンラッド論である「コンラッドにおける shade と shadow に就いて」という論文がある。これは「shade」と「shadow」がコンラッドの作品の中で、どのように使われているのかを検証することを目的としている。「shade」と「shadow」の一般的な意味を OED などで調べ、次にコンラッドの作品の中で使われている「shade」と「shadow」という単語の意味を、様々な文章を引用して比較検証していくのである<sup>4</sup>。

この丸山の論文は、文学研究というよりも、非常に言語学的、もしくは英語学的な側面が色濃く漂うものだ。ある作品を主観的独断的に論じること、つまり近代日本の批評のメインストリームである小林秀雄的なスタイルを退け、あくまでも客観的に英語という言語の構造に注目するのが丸山の研究の特徴と言えよう。丸山は前述の論文のなかで「従来の文学研究に対して新たなる一石を投じたものであることを疑うことはできない」と主張したが、「Conrad の中心思想を解剖することはまたの他の機会に於いて試みるつもりである」(丸山 d63) と述べている。丸山にとって重要なのは、「コンラッドの中心思想」といった作者の思想的な問題点や作品内容を検討することにあるのではなく、あくまでもコンラッドの「英語」の特徴を客観的に検討することだった。

丸山の研究スタイルは、東田のコンラッド研究とも重なり合う。1930 年代から 40 年代にかけて、日本の英文学者のなかではコンラッド作品に強い関心を持ち続けた両者の関心は、コンラッド作品の内容というよりも、むしろコンラッドの「英語」にあったと言える。いわば英文学研究者と言うよりも、英語教員としての丸山と東田の姿と、コンラッド作品との関係が

浮かび上るのである。

#### 4) 丸山学・コンラッド・英語教育

丸山学は 1904 年熊本県玉名郡江田町（現、菊水町）に生まれた。1917 年に済々賀中学に入学する。この中学時代に生涯の友となる蓮田善明と出会う。1921 年に廣島高等師範学校第二部（英語専攻）に入学、1925 年 3 月、廣島高等師範学校を卒業し、同年 4 月、陸軍歩兵第 23 連隊に入営、1927 年に少尉に任官し除隊。直後に熊本県立熊本中学校に英語教師として赴任し、2 年後の 1929 年に廣島文理科大学の第一期生として入学するために廣島に戻り、丸山はここから本格的に英文学の研究を始める。

あるエッセイで丸山は、中学時代に体験した臨海学校について「後年、英文学をやるようになって海洋文学を専攻し、また民俗学に傾倒するに及んで河童のテーマに興味を持つような下地が、ここにあったのである」（丸山 a 470）と述べているが、廣島高等師範学校に入学後、英文学の中でも特に海洋文学に強い関心を持つようになった。たとえば廣島高等師範学校の 2 年（1923 年）の夏の洋上体験について次のように回顧している。

夜の太平洋の星のまたたく下で、甲板に出て、老練兵曹長を囲んで海の話をきいたのが、私に強い刺激であった。後に私がイギリスの海洋文学に傾倒し、コンラッドやモームの小説を耽読し、それを講義のテキストに使ったりするようになる機縁もここにあった。（丸山 a 471）

丸山にとって、海原での体験とコンラッドの作品との出会いは、英文学者としての自己形成にとって重要なものだった。実際、廣島文理科大学在学中コンラッド研究に励んだ丸山は、1932 年にコンラッドに関する卒業論文を提出し、卒業後は先述したように母校廣島高等師範学校の講師に任命される。廣島高等師範学校から廣島文理科大学、そして母校廣島高等師範学校の教員として任官することになった丸山は、東田とは異なる形で英文学研究・英語教育研究界のエリートコースを歩んでいた。そして 1933 年には、春陽堂から丸山の代表作の一つとなる『文学研究法』を出版し、研究者・教育者としての地位を確固としたものとしていく。

しかし『文学研究法』からは、若き丸山の洋上体験といったロマンスを伺い知ることは出来ない。なぜなら『文学研究法』は文学研究の方法論に関する解説書であり、文学研究を「言語的研究」「内面的研究」「特殊研究」という三つのカテゴリーに分けることから始まり、多種多様な文学研究法を紹介していくものだからだ。

丸山によれば、「言語的研究」とは、文学作品の語彙や文体などに注目するものであり、これは主に丸山や東田の関心領域と重なる。「内面的研究」とは、作品や作家の生きた時代の社会的な特色や、地理的状況などを参照することによって文学作品の関係を明らかにするものであり、「作品研究」「作者研究」「時代研究」といったものの総称であると言う。これは一般的に言われる文学研究のことであり、たとえば丸山は「志賀直哉とコンラッド」と題して次のように「作品研究」を説明している。

『秘境行』の素材研究はコンラッドの伝記に就いて彼のこのコンゴ河航の記録を調査することを以て始まる。(中略) この素材研究をすすめる上に非常に有利な資料となるものは、彼の全集の一冊の中に入つて出版されているところの『コンゴ日記』である。(中略) この両者を比較研究することによって、コンラッドの独創性を検査することが出来、同時にこの作品に盛られた意図もほぼ正確に判定することができるであろう。作者の小説作者としての技巧も明確になるし、作者の自然に対する態度を忖度することにも役立つであろう。(丸山 b 123-24)

丸山が言う『秘境行』とは *Heart of Darkness* のことだ。上記の一文は 1930 年代の日本の英文学者が *Heart of Darkness* について言及した数少ない例であり、丸山のコンラッド作品への造詣の深さを知ることができる。しかし丸山自身が『文学研究法』で、たとえば『コンゴ日記』と『秘境行』を具体的に比較研究することはない。あくまでも研究方法の一例を示すために『秘境行』と『コンゴ日記』を挙げている。

『文学研究法』について榎井迪夫は、1920 年代から 30 年代の「印象主義的な鑑賞が主流であったときに冷ややかな眼で迎えられる空気」(榎井 391) があったと指摘しているが、印象主義的な文学鑑賞はもとより、たとえば『文学研究法』から 1 年後に出版された土居光知の『文学序説』のような

独自性や発展性は『文学研究法』には見られない。

そもそも丸山は、「文学批評」と「文学研究」を区別している。土居のような研究は、いわば「文学批評」であり、それは「主観的なものであり、批評者の個人性がその批評の上に重大な決定性を持つものである」(丸山 a38)。各自の主観を基にした文学批評は多様な解釈をもたらすもので、唯一の解釈といったものは存在しない。それに対して、「文学研究」の目的は、たとえば多種多様な研究方法を整理し分類することによって「真理の発見や法則の機能」(丸山 a38)を明らかにすることである。丸山にとって「文学研究」とは誰が行おうとも「同一の結果に到達すべき性質のもの」(丸山 a39)でなければならなかった。それは多種多様な研究方法を、まるで植物学のように分類し系統化しようとしている。たとえば『文学研究法』第二章の「言語的研究」では、「文学と文字と言語」「語彙研究」「文章研究」「韻律研究」「書誌研究」「原文研究」と研究方法を出来るだけ細分化する。しかし丸山はそれでも自身の分類方法に満足がいかない。

私は本書を完全なものとしては決して考えていない。その分類に於いても、名称の付け方に於いても、また特に実例の選択に於いて、不十分な点が非常に多いであろうと思う。(丸山 b12)

このような丸山の分類と系統化への熱情は、英文学研究というより、植物学者のような印象さえ受ける。先述した丸山の処女論文「コンラッドにおける shade と shadow に就いて」でも、コンラッドの英語を、方言のサンプルのように採取し分類していくが、言ってみれば丸山の研究スタイルは、民話や方言の採集を行う民俗学者のような側面がある。実際丸山は、英文学研究と平行して、柳田国男と連絡を取りながら瀬戸内の民話の収集を行っていた民俗学者でもあり、太平洋戦争後は英文学者ではなく民俗学者としてその名を知られるようになる。つまり若き丸山は、民俗学と英文学の間に位置しながら自己形成を遂げていったのであり、ラフカディオ・ハーンを民俗学者として考察した『小泉八雲新考』(昭和 11 年)は、丸山の代表作として知られることになるだろう。

処女論文から『文学研究法』まで、丸山は管見の限り戦前の「英文学者」のなかでもとりわけコンラッド作品に关心を持っていた。しかし、東田と

同様、丸山の英文学者としての軌跡から見いだされるのは、コンラッドの「英語」への強い関心であり、戦前日本の中等英語教育とコンラッド作品との親密性である。しかしいつたま、丸山はコンラッドについて何を思い、その作品の何を愛したのだろうか。

### おわりに—「英文学」とコンラッドとの間で

1930年代の中ばになると丸山の人生は大きく変わる。1937年8月に応召され中国戦線に送られるからだ<sup>5</sup>。前線に送られた後、南京報道部付きとなり、時間の余裕が出来た丸山は中国戦線についてのエッセイ集である『野戦風情』を1940年に出版している。1941年によくやく兵役を解除され、翌年42年には廣島高等師範学校文科第二部長となつたが、この年に『大陸の思想戦』と題するテキストを出版している。そして1943年には再び徴兵され、陸軍大尉として熊本西部第16部隊に終戦まで所属することになるが、この年、丸山は『英國の東亜觀』を出版している。

40年代の丸山は、兵役に就きながらも精力的に執筆活動を行うようになったが英文学関係に焦点を絞ってみると、『英國の東亜觀』は興味深い。丸山は、コンラッドやラフカディオ・ハーン、そしてモームやスティーブンソンなど、丸山が親しんだ英語文学で、どのようにアジアとその海域が描かれているのかを紹介している。

『英國の東亜觀』において丸山は、激越な調子で欧米の帝国主義や植民主義を批判することはない。淡々と英語文学のアジア表象を紹介し続けている。丸山はいたって冷静に筆を進める。しかし、冷静さが一時破られることがある。

ハーンとコンラッドは決して別の時代の人ではない。前にも述べたように、ハーンの日本からの第一の作品たる『見知らぬ日本の瞥見』が出た翌年にコンラッドの処女作『オールメイヤーの愚行』が出ているし、その後この二人はずっと引き続いて英語国の大書界に、華やかさはないが根強い支持者を持って存在を続けている。この二人に共通する点は、いずれも純粹のアングロサクソンでなく、その点、人種的偏見を有しなかつたし、また若い頃から国外に出て、白人以外の多くの異民族に接して広い見識を持っていたことである。アングロサクソンが世界制覇を完了し

た時期に、あたかも申し合わせたかのようにこの二人の外国人が英文壇に出現して「文明」が犯す罪悪を指摘したことは興味ある事実でなければならぬ。(丸山 c340)

丸山はコンラッドとハーンを例に挙げて、「英語」を、アメリカやイギリスといった敵対する者たちに内在する固有の「言語」というよりも、それをコミュニケーションのための透明な媒体として捉えようとする。そして「英語」で書くこと、つまり「英語」を習得することが、英米という敵に従属することを意味せず、兵学校のように、それは敵を知るための道具となり、さらには敵を批判し、戦うための武器となる可能性を示唆する。武器としての「英語」、例えば1943年6月の『英語青年』に次のような記事がある。「日本人の文才は彼等西洋人に比して決して劣るものでも稚拙といわれる状態で足踏みしているわけのものでもない。コンラッドが英人に舌を巻かせる英文の作者であったようなことも、之から大いに現れるであろう。」(片々録22)。one of usとしてのコンラッド。コンラッドのように我々が成ること。コンラッドは「我々」の仲間と見なされる。1940年代に入り、コンラッドの作品が、単に「英語」を学ぶための教科書ではなく、日本の海洋文学や植民地文学を考え、そして欧米を批判するための重要なヒントを与えてくれることに人々は気づき始めた。いわば時代の要請により、アクチュアルなものとしてコンラッド作品は変容し、英文学者のみならず、文学者全般にとってコンラッドという名は、そしてその作品は、魅力的なものとなっていました。

コンラッドの作品は、社会的な問題を告発し、国家体制を批判するような危険性を伴わないものであり、兵学校でも教材として安心して生徒たちに勧められる「健全」なテキストだった。そのような「健全」なテキストが、1940年代に入り、戦禍が深まるにつれて、「危険」で様々な可能性に満ちたテキストとして読まれ始めたと言えるのかもしれない?しかし結局、無謀な戦争は、もはや人々にコンラッドの作品をさらに深く読ませる機会を与えることはなかった。『英國の東亜観』を書き終えた丸山は、終戦後、戦中の仕事について深く語らず世を去り、東田も兵学校時代について深く語ることはなかった。丸山や東田のこの沈黙は、戦後のある時期までの「日

本」の英文学者たちの一つの典型と言えるが、それは戦後の「日本」のコンラッド研究が、戦前のコンラッド研究の忘却の上に成立していた／いることを意味する。

忘れてはならないのは、1940年代、ほんの一瞬だが「日本」の英文学者・英語教育者たちはコンラッドの作品をリアルなものとして捉え、少なからぬ若き兵学校の生徒たちが、『ロード・ジム』を読み、そして、戦地に向かったという事実である。明治以降、現在に至るまで、これほど多くの人々が、コンラッドとその作品に親しい関係を持ち得た時があっただろうか。私たちは、コンラッドへのその近しさに目を背けてはならず、「日本語」で、そして「日本」で、コンラッド研究をすることの意味について考えていかなければならない。それこそが、ニッポンの Conradian としての倫理である。

## 註

- 1 東田の海軍兵学校時代の論文としては以下のものがある。「D. H. Lawrence の散文体」『英語と英文学』(1月号 (1939): 2-9) 「“On the Prose Style of D.H. Lawrence”」『英文学研究』日本英文学会 XIX, 4, (1939): 545-56。『Joseph Conrad の初期の文章』『英文学研究』日本英文学会, XXIII, 1 (1943): 55-63。
- 2 海軍兵学校の蔵書について寺田芳徳は、「海軍図書訳 2万冊は進駐軍に没収焼却され、残りの普通学関係の和漢洋書約 4千冊が旧制広島文理科大学、広島高等師範学校へ昭和 21 年に転用図書」(寺田 54) となつたと述べているが、判明している限り海軍兵学校には *Arrow of Gold* と *Under Western Eyes* が所蔵されていた。
- 3 佐藤美希「昭和 20 年代の英文学翻訳と英文学研究 : 「英語青年」誌における翻訳規範の形成とそのコンテクスト」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』7 号 (2008): 25-27 参照。
- 4 具体例を一つ挙げておく。「繊細な、肉眼ではその存在を容易に認識し得ないものと云う意味から来て、Conrad に於いては *a shade* と云う表現が副詞的用法として *a little* と同じ様な意味で使用されている。」(丸山 d53)
- 5 ちなみに東田は終戦まで海軍兵学校教授を務めたために実戦経験はなかった。終戦後は広島高等師範学校教授に、そして 1952 年には大阪女子大学教授となり、1972 年には金沢大学教授となつてゐる。
- 6 1941 年の『国文学 解釈と鑑賞』では、国文学の研究者である小池藤五郎が「近

世文学は、海洋という点に於いて最も狭き浅さの悲哀を感じさせられる。時代が古い点もあるが、そこには一人のコンラッド（Theodor Jozef Konrad Krozeniowski）も見えない」（小池 66）と指摘している。

7 紙面の都合上、今回は割愛したが、1920 年代から 40 年代にかけて、実は日本におけるモダニズム文学の紹介者であった春山行夫を筆頭に、東京の文学者たちもコンラッドについて度々言及している。丸山を中心とした「軍都」広島と、春山を中心とした「帝都」東京におけるコンラッド受容の比較によって、日本のコンラッド受容の特色はさらに明確になるだろう。東京を中心としたコンラッド受容については機会を改めて論じる予定である。

### 参照文献

- 阿川弘之『井上成美』新潮文庫、1992。
- 岩田春風「機関雑誌の発行に就いて」『燈光』第 1 卷第 1 号 (1915): 9-10。
- 江利川春雄『近代日本の英語教育史』東信堂、2006。
- .『日本人は英語をどう学んで来たか』研究社、2008。
- 小池藤五郎「江戸文学にあらわれたる海洋意識」『国文学 解釈と鑑賞』第 34 卷第 6 号 (1941): 51-65。
- 関谷生「英文学雑談」『燈光』第 10 卷第 1 号 (1924): 33-35。
- 寺田芳徳「英書に見る広島の英学－庄原英学校、海軍兵学校、加計隅屋文庫を中心に」『英学史研究』第 13 号、50-61。
- 東田千秋 a. 「NOSTROMO の文章」『市河博士還暦祝賀論集』研究社 (1946): 35-44。  
 ——. b. 「Joseph Conrad の初期の文章」『英文学研究』第 23 卷第 1 号 (1943): 55-63。  
 ——. c. 「私の英文学研究を顧みて」『言語と文体』大阪教育図書株式会社 1974。
- 「片々録」『英語青年』第 34 卷第 7 号 (1943): 22。
- 巻忠雄「コンラッドの文章について」『Conrad 研究』広島高等師範学校英語会、1935: 23-24。
- 増山紀夫「Nigger of the Narcissus」『Conrad 研究』広島高等師範学校英語会、1935: 27-30.
- 樹井迪夫「文学篇解説」『丸山学選集』文学篇、古川書房、1976、338-400。
- 松村幹男「太平洋戦争中の英語研究」『英學史論叢』日本英学史学会  
 中国・四国支部第 7 (2004): 34-40.
- 丸山学 a. 『丸山学選集』文学篇、古川書房、1976。  
 ——. b. 『文学研究法』春陽堂、1934。

- . c. 『英国人の東亜観』京極書店、1944。
- . d. 「コンラッドにおける shadow 及び shade について彼の中心思想への一つの接近」『英語英文学論叢』第6号 (1934): 235-245.

(わきた ひろまさ 都留文科大学非常勤講師)